



TITLE:

アルプスの[聚]落

AUTHOR(S):

田中, 阿歌麿

CITATION:

田中, 阿歌麿. アルプスの[聚]落. 地球 1926, 5(4): 392-406

ISSUE DATE:

1926-04-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183076>

RIGHT:

落の様に毎年何回かの祭禮の時のみ活動するものもあり、花時や紅葉時にのみ榮える遊覽都市などそれから樺太などの海岸には漁期のみの聚落があるし、熊野川の沿岸には減水期に河積の上に出来て増水期には撤廢される聚落がある。これ等は種々の立場から色々に分類され得るであらう。

聚落の急變に就ては本誌海岸號に『一時的港市に就て』と題して一例を説明したことがあるから茲には省略することとする。

アルプスの聚落

田中阿歌鷹

私は青年時代にスウキスに在て、山野を跋涉し、大に其山地の感化を受け、又大に之等の地方に親しみを持つ様になつた。其後スウキス山地の聚落や住民の生活状態、殊に移牧生活等の事に就ては、趣味を持つて、種々な書物の出版される毎に、之れを取急ぎ繙いたものである。之等の關係から數年前再び此國に遊ぶ機を得たので、各所を見學したが、内にもローヌ Rhone 河谷と、其支谷の或るものに就て、稍々細かに觀察することを得たのである。それで次に少しくヴァレー Valais アルプス地方の聚落と、其住民の生活状態の一端を紹介して見やうとするものである。

ローヌ河谷に於ける常住聚落

スウキス國のローヌ河谷中マルチギー Martigny より上流に於ける流域内人口の分布を見るに、住民の分布を支配する主要なる條件は次の諸項である。

1. 土地の傾斜
2. 土地の日向
3. 溪流の最近距離
4. 高地
5. 低地
6. 地質

但人口が増加して或程度に達すれば最早新來の子孫に生活の餘裕がない爲め右の要件に制限を附せられる。ウエレーの谷では現今人口一四・九八〇人あつて既に制限點に達して居る。ローヌ氷河よりマルチギーに至るローヌ河谷の人口は其左岸には僅に二〇、〇〇〇人の住民あるも、右岸には三四、〇〇〇人の住民を有して居る。如斯兩岸に於て人口の密度に著しい差を見るは、右岸は其對岸に比し地貌稍々平夷なるを以て聚落の發達に適するは言ふまでもないが、主として日照時間の長短に基くもので河の兩岸は日照時間に甚しき差があると言はれて居る。此區域内の或部分で兩岸共に同一の地貌を有する地方即ちコンシュ Condé 郡に於ても其太陽に暴露せる方面には三、〇〇〇の人口を有し、其對岸即ち日蔭の方面には僅に七〇〇乃至八〇〇の人口を有するに過ぎない。尙溪谷が深くて河岸の平地が狭い場合には此影響も一層大きいのである。此日向、日蔭の意の地名は各地に見る所で我國にも山陽、山陰其他があり、又ドイツでは Sonnenseite と云ひ、フンクス・ドウヒイネ Dauphiné の俗語では Adrech 又 Adreit の稱あるも皆之である。日照の状態如何は兩河岸の住民

の心理學上の諸性質にまで重大なる關係を持つて居る。右岸即ち太陽に面する地方の住民の生活狀態は裕福であつて活氣を呈し、又文化の程度も遙に其對岸の住民を凌駕して居る。此日照の影響は特に日蔭の地方の下級住民に於て顯著である。レクキンゲン Reckingen (ローヌ河上流の右岸にある) 村落の如き其好例と云ふべく、一村内でも住民は自ら二種に區別され日向と日蔭に居るものとは著しい差がある。之全く其住所の日照時間の長短に基因するのである。

低地では、洪水の虞があるから、人口は極めて少なく、即ブリグ Brigよりサン、モリス Saint Maurice に至る間のローヌ河の洪瀕地の如きは、此適例である。けれども近年堤防の修築と、鐵道の敷設との爲人口も次第に増加の傾向がある。又高地に至れば、住居の高低は、縦谷(即主谷)と、横谷(即側谷)とに由つて、著しく異つて居る。即横谷に於ける聚落の位置は、概して縦谷に於けるものよりも高地にある。例へばローヌ河右岸の縦谷に在る聚落は一、二〇〇米の高度を超ゆることは稀なれども横谷に入ると、アイヤン Ayent ローシェ、ン、ブー Loèche-les-Bains 等の聚落では、一、四八四米と一、四一一米の高所に達して居る。

次に土地の傾斜と云ふ事をも考へると、嘗て氷河が造た段丘の有無は、やはり其主要條件である。若し段丘がないとすれば、住民は牧場に接近したい爲、兎角高所に住居しようとするのである。故に此段丘の存否は、村の廣狹に影響するものであつて、段丘の發達した地方は、一村内に幾多の小

聚落を生み、人口も亦多いが段丘のない地方は、一村の區域も狭く、人口も亦少ないのである。ロース河の支流が本流に注ぐ所謂合流點附近の山斜の兩側を見ると、大抵段丘によつて迫られ、狹谷を作り、其上には必ず一聚落の建つを常として居る。又人類は溪流の附近に住せんとするのは當然である。溪流の扇狀地の上は、地味が豊沃で給水の便があり、洪水の虞なく、加之横谷は多く山中の通路に當るのである。故に人口の中心は、本支流の合流點に在るのが常である。又ロース河上流地方及コンシュ川の溪谷の如き小距離内に、多數の支流を有する地方では、部落は小さいが、其數多く即後者は二十四軒の小距離に、十六の聚落があつて、孰れも人口四〇〇を超ゆるものはない。尙主流と主流との分水線との距離の遠近により、聚落人口の疎密を異にして居る。若し又二箇の扇狀地の距離極めて大なるときは、以上の原始聚落の間に、新聚落を生ずるのである。

聚落の標式と高度

山地に於ける聚落に關する高度を精査するには、先づ其聚落が何れの聚落標式に屬するかを分類しなければならない。アルプス山地中人類の定住に最も便なる場所は村役場、又は宗教小教區事務所の所在地の周圍に制限せられ、少數の住民を有するのみで往々小團體の成立を許す限り各地に分離して支村を作り稍々もすれば著大の高度の地に設けらるゝことがある。村落に關する地理學上の研究に於ては、山塊中最高の聚落を摘示するけれども其支村は殆んど常に本村より遙に高所に存在

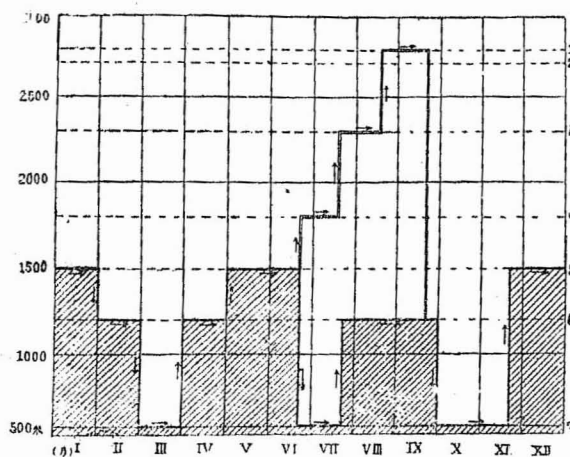
せるを以て研究上尙若干の餘地を存するのである。以上記載した所は趣の少ない本村所在地の高度に重きをおかず、そして國內に於ける最高聚落の目録を調製するに當り、スウキスでは小教區事務所の所在地聚落たる「寺村式村落」Kirchdörfenの存在は正しく此高度に於て比較的多數の人口の存在及び此人口の生活に必要な要素の集合如何を證明するに過ぎないのである。

此主義によつて計算したスウキス國最高の村落は左の如くである。

クレスタ Cresta (グロウフンテンム Graubünden 州)	一、九四九米
クレスタの支村シュフ Juf	二、一三三
夏季聚落フィンデンム Findelen	二、〇七五
シアンドラン Chandolin	一、九三六
リュイ La Grouwunテン州ムンステルタル (Münsterthal 谷)	一、九一八
アロザ Arosa (グロウフンテン州)	一、八九二
サンモリッツ Saint-Moritz (グロウフンテン州アンガザン谷 Engadine)	一、八五六
ポントレシーナ Pontresina (グロウフンテン州)	一、八〇三

移 牧 の 概 況

次にアンニヴィエール谷 Val d'Anniviers とツェルマット Zermatt 谷に於ける移住民の一時的移住の概況を記載しよう。



アンニヴイエール谷住民移住概況

太き線は谷底に於ける又細き並行線は牧場に於ける移動を示す

1. 上部牧場 (2800米)
2. 最高地の小屋 (2665米)
3. 中部牧場 (2300米)
4. 下部牧場 (1800米)
5. 支聚落 (約1500米)
6. 本村聚落 (1220-1936米)
7. ローヌ河谷-Sierre (550米)

F.-O. Wolf 及 Schröter による

(一) アンニヴイエール谷のシアンドラン Chaudolin 村落は高度一、九三六米に位し、此地は彼のジユフ「E」村落に亞ぎスウキス中最高度を占むる村落である。此村落の位置は全く南面し其高度の顯著なる此一小聚落は實に收畜地帯以高にある。之より高いのは僅に「アルプ」Alpと稱する一種の高山牧場あるのみである。斯の如き地は春季他の山間住民が家畜を率ゐて山上に登るを常とす

れども、シアンドラン

の住民は之に反し家畜

と共に谿谷に移下し數

週間の後、短期を限り

「アルプ」に移牧するも

ので一年の大部分は自

己の冬季住地より低き

高度の地にあるのであ

る。アンニヴイエー

ル谷の住民も亦純然た

る遊牧民であつて高度

一、三〇〇乃至一、九三六米の間に於ける聚落に定住しながら高度四五〇米の地に下り、シエール Siere 附近ローヌ Rhone 河畔の畑地や葡萄園の耕作に従事する事暫らくで再び高度二、七〇〇米の高所に攀り「アルプ」で牧畜を営むのである。

(二) ツェルマット Zermatt に下れるフィンデレン Findelen 川谷にある同名の聚落も亦日向の影嚮の一適例である。此地は夏季の住村で南斜面に構へられ高度二、〇七五米實にシアンドランより高き事一三九米、而してスウキス最高の聚落たるジュフよりは五八米低いのである。是全く日常りの宜いためで斯の如き高所に人類の住居を許すのみならず、各種の耕作物も亦其高度に對する平均限線を超過して居る。聚落の下部は深谷に臨み谷底には溪水流れてフィンデレン氷河 Findelen-gletscher ストラルホルン山 Stralhorn の積雪、氷河と相對し數頃の穀類耕地は僅に成熟するを得。高度二、一〇〇米までは裸麥 *Cecale cereale*、大麥 *Hordeum distichon* L. var. *nutans* Schübler を耕作し、夫以高の地に至れば「アルプ」草地となり地味悪しく且不毛で *Festuca valesica* Schl. *Poa bulbosa* L. の芝生を見る。

以上記する處は日向斜面の村落狀況である。其反對なる斜面の村落は全く一日中日光を受けることが少ない。そしてアロル Arollas (松杉科) 林を以て掩はれ、林間の空地はアルプ帶植物が叢生して居るのみである。此空地はフィンデレン村落の耕地より高度の低いにも拘らず八月に於ても尙

殘雪があつて針葉樹林の爲め其融解を妨げられて居る。故に日向日蔭の兩斜面は僅に數百米を相隔てながらも其地に生ずる植物は斯の如く緯度に於て二五度の遠隔なる地の産に等しき奇觀を呈するのである。之皆日光照射の如何に基く現象である。

高地一時的聚落

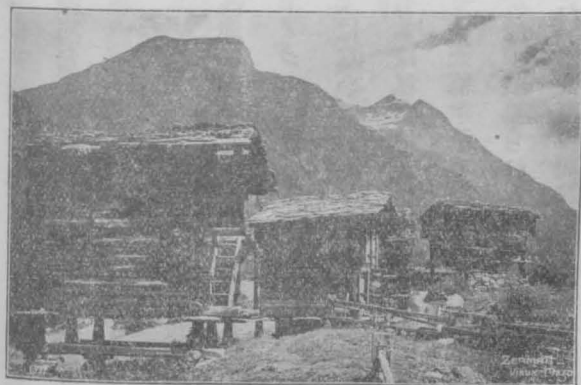
常住家屋の外に高地牧畜の行はるゝ地方では、夏季數週間高地に移牧し其爲めに種々なる高度に小屋を建設するのである。之等一種の遊牧制度については從來アジアの高臺や草地ステップに於て研究されたものがあり、又アフリカ等に於ても研究されたものが無いではないが、ヨーロッパに於ける之等の研究は比較的新しいものである。アルプ山地での遊牧は村有又は私有地及び常住家屋の附近に存し、面積の小さい牧場内に行はれて居る。アジャやアフリカでは天幕生活であるから天幕を持つて隨時移住して行くのであるが、ヨーロッパでは種々な高度に小屋が設けられるのである。そして之等の小屋は夏季の住居と云ふ許りでなく、家畜の避難所であつたり、牧草の刈貯庫であつたり、又は乳油、乾酪等の製造所にもなるのである。夫等地理上の分布は村落よりの距離即ち高度との關係である。そして谷底にある常住家屋から漸次に斜面を登るに従ひ種々なる小屋が見られるのである。之に早くから着眼し研究したのはイタリアのオレント・マリネリ *Olinto Marinelli* 氏である。氏の研究は東アルプス、殊にベネチア地方のアルプス山地で研究されたものであるが、聚落の研究上極

めて有趣なものである。次に其大様を述べやう。

東ベネチアのアルプ諸溪谷では、下部の常住地である所の聚落から山地の斜面を登るに従ひ種々なる標式の一時的住家が發見せられるのである。

第一標式 スタボツ(Stavoll) カルニツク、アルプ Carnic Alp 山地に多く、カドレ Cadore 地方には極めて稀である。此標式の小屋は、一般春季に家畜を平地から高山の牧場に移すとき、又は秋季家畜を平地に引き換へる際、稍や久しい間家畜を滞在させる爲に用ひるものである。そして家屋の構造は全部木造の一軒家で其下部は左官工事を施したのもあるが家根は板葺である。其一棟の内は住居、家畜室、物置等三部からなつて居る。

第二標式 フェニル(Fenile) カドレ地方に多くカルニツク、アルプ山地には極めて少ない。牧草を刈り取つて、一時積んで置く事を目的とし、草刈期にのみ住家として使用するに過ぎない。全部木造で屋根は板又は木皮である。其土臺は木杭又は石垣を疊み、其上に小屋を築造し、窓の設けはない。然



エツマルツに見るアルプ式小屋の群

れども其側面は大幹の木材を其儘二つ割りとなし、粗に積み重ねたものであるから、隙間多く空氣の流通は極めて宜い。

第三標式 カセラ (Casera) 此小屋は高山牧場に於て、夏季作業中牧畜者の住居とし、又各種乳製品の製造をなす際に使用する。一般に村有であつて、村民は各々が所有する家畜を、此小屋に送致し置き、各人協力して牛乳の搾取及び各種の製造に従事し、其収益は此共同事業に供給せる家畜の頭數及其牛乳の量に比例し分配す。要するに此事業はアルプ山地に行はるゝ純然たる一の協同乳業場とも稱し得べきである。而して此標式の小屋は孰れも、牧場の中心に建築せらるゝものであるが、其標式は左の二種に區別することが出来る。

1 カセラ (Casera) 大部分左官工事を以てし、木造のものは極めて稀で家根は一般に板葺である。元來カセラは、單に一室あるのみなれど、現今は普通平家造りの三室から成り、又二階を有するときは、四室より成つて居る。

2 ログ (Loggie) ログ一名テトイェ Tetoie は、夜間中小屋として使用し、其形は甚だ狹長で唯一方のみを閉してゐる。一般に木造で稀に左官工事又は石垣を設け、家根は板葺の片側家根である。又山羊を飼用するには、此ログを設けることなく、唯に石垣を築き、其内に入れるを普通として居る。

第四標式 リコヴェラ (Ricovere) 一般にカセレン式小屋の分布區域より遙に高い地方にある。常に牧畜者の用に供するのみならず、常に樵夫又は獵夫によつて使用せられ、是も亦自ら二種ある。

1 バキット (Baite) バキットは、草刈又は炭燒の爲に使用する小さな假小屋で、薪炭、刈草等を貯藏し、又牧畜者、獵夫等が數日間の宿泊に使用するものである。其形は一定しないが、天然の地形、即ち岩崖或は洞窟等を利用し、片側家根で一般に樹皮、樅枝、或は板葺である。

2 カンネ (Casone) カンネは其用途前者と殆んど同様であるが、其存在は稍や永久的である。其形極めてフニレン式小屋に類似し、其大さは、遙に大きい。但し側面は、板葺で間隙なく空氣の流通宜敷くないのである。

小屋の配置

カセレン式小屋は、一般に一軒家として存すれども、例外としてベリユノ Belluno 山地の如く、一牧場内に三四軒集合するものもある。之れ一牧場に數多の家族の所有地が入り込んで居るが爲で、斯の如きはレンシア Resia トナノ Torre ナチンネ Natissone の諸谿谷及ロヴェヌス人の牧場に於ても之を見る。かゝる地方に於ては村有牧場を或數多の家族に貸付をなす習慣があつて、各農家は各々其カセラを建設し、各々牛乳搾取に従事するのであるのである。そして斯くカセラ式小屋が、相互に離れて一牧場内に散在する有様は、恰かも始原代の村落の如き感を抱かせるのである。故に是等

は、冬村（永住の人家）に對し、夏村とも稱し得べく、其狀態は、ガイル、*Wien* 谷及其他コルシカ島の或地方に於ても亦見ることが出来るのである。

移牧制度と所有權

アルプ山地の遊牧制度は、亞細亞其他の者と酷似して居る。之其地理上の諸原因が、此兩地方をして植物地理上に著しく類似して居るからである。元來牧畜業は、全く水草を逐ふて各所に移遷する者なれば、勢ひ遊牧主義の傾向がある。そして人口の増加は、土地の開發に直接の關係を有する者で、其始め土地の所有權は、全く共有的であつた。然れども徐々に農業起り、終に土地權が個人の專有となつた。古代ドイツのマルク Marks 人の如き現今ロシア、ダゲスタン Daghestan の如き現象を目して、所有權變遷の第一期にある者とした事があるけれども、此說には同意し難い。マリネリー氏は、アルプ山地に於ける共有權の存在及共同作業は此地方の地形及人事と關連して起つた者。即牧畜業其者自らが氣候と密接の關係があり、且人口稀少なるが爲に起つた産業であるから、人口の増加に伴ひ、耕作業は、自然に發達すべきである。従つて高山牧畜業は、共有權の一標式として、久しく存するも、遂には個人專有の事業と變じ去つたのであると。

各標式小屋の地理上分布

地形と高度の關係 牧場を三帶に區分し、其各帶に固有の住家分布標式を其高距に對し、次の如

く分類した。即村落の家屋は、冬季の住居であつて、スタボリ式小屋は、春秋二季、カセレ式小屋は夏の住居である。同氏は領内の八地方に就き、之を三區(1)外帶一名前山帶アルプ(2)中帶及(3)内帶とし、其、布を精査した。

イ、各帶は内帶地方より外帶地方に向ひ低下す。

ロ、外帶地方では、スタボリ式小屋の分布區域少く、カセレ式小屋の分布區域は、高距甚だ低し。バ、カセレ式小屋の分布區域は、一つの森林帶に依り、二帶に切斷せられ、上帶は天然の牧場より成れども、下帶の者は、森林濫伐の結果得たる新牧場より成る。

ニ、バキット式の小屋分布區域は、カセレ式小屋の分布區域より上層にあつて、腹瘠なる牧場より成り、アルプ前山帶に於ては、高度二四〇〇米を超ゆ。

各帶と其植物 又マリネリ氏は、住家と他の關係とに依り、次の如く分類した。

1 永久住居帶 農産耕地と一致し、玉蜀黍は、此標式農産物である。

2 スタボリ帶 大約耕作不充分的な地帶と一致し、耕作物は馬鈴薯の耕作を以て、其主なるものとし、他の農産物の多くは、既に此帶に於て盡く。

3 カセレ本帶 森村に富む地方と一致す。

4 上部カセレ帶 灌木又は草類の帶と一致し、又此帶は、氷河の堆積湖及圍谷等の存在する所

である。

各帶と其交通機關 又交通機關の點から云ふと、下帶は道路、中帶は驛馬を通ずる徑路、カセレ帶は牛を通ずる小徑、最後の帶には、最早や歩行者の爲にも、判然見分ける事の出来ない細徑に過ぎない。要するに、各帶間の交通及前述の諸現象は、吾人が想像するが如く、密接なる關係を有するものでない。今其一例を挙げると、新道路の開通は必ずしも、永久住家帶の變更を促さず、又夏季住居の存在は、必ずしも、高距と一致しないで、地理の狀況即岩石があつて、風を避掩する處、又は涌泉の噴出する處等が、實に其分布に關して居るのである。斯くして人類は、牧場の開發に關し、種々な變化を與へ、尙ほ下層の動植物中永久住家帶の者をして、カセレ帶又は之と反對の方向に運搬し混同せしむるのである。

以上はアルプ山地に於ける聚落に關する研究の概要に過ぎないのである。此種の研究は、近年ヨーロッパの各地に於て、注意せらるゝ所となつて、其歩を進めつゝある。

フランス、グロノーブル Grenoble 大學に附屬して居るアルプ地理學教室の如きは、既に十數年前に創設せられて居て、此種の研究に向つて居る。又聞く所によると、オーストリア、インスブルック Innsbruck 大學にも此種のものが設けらるゝとの事である。

本邦で私が、種々なる場合に聞及んだり、或は見學を試みた所によるも、此種の山地の聚落並に其住民の生活状態は、随分趣味の多いものがあるらしく、石川縣と福井縣との縣界をなす山地に於ける、夏季聚落(出作り)の如きものや、赤城火山南斜面の移牧生活の如き、或は長野縣白骨温泉附近に於ける高地耕作の如きは、此種に屬するものである。尙其他にも種々あると思ふが、將來此種の研究を進めて、本邦山地住民の生活状態と、自然に闘ひつゝある状態を知る事は、地理學上、獨り聚落地理學のみならず、經濟地理學に於ても、極めて必要な事である。

○石垣島の人口減少

石垣島(面積一六方里七五)は八重山群島の一つで沖繩本島よりも臺灣に近い島である。或は稱して汚されぬ自然博物館と讃へられ、或は歌の島だと賞でられる。然し日光は餘りに輝き過ぎ、酷熱は人間の活動を制扼する。風速四〇米——六〇米の颶風は人間の營みを吹き飛ばして丁ふ、濛雨、濕潤に加へて恐るべき地變が襲ふたこともある。猛惡なマラリヤ蚊や蝕害極まりない白蟻は繁殖して居、熱帶性フィラリア、象皮病、デング熱、熱帶赤痢がある。

古記録に依つて本島の人口動態を見るに、紀元二四三一年には十九箇村に住居した島民は二萬七千四百四十人に達し、白保村の如き三千四百人以上に及び、千人以上の人口を有する部落十三を算した、然るに同年四月二十四日(陰曆三月十日)強震に伴つて起つた大津波は是等の諸村を襲つて溺死者九千四百八十

八人の多きに達し、一朝にして人口の三分の一以上を失つた。此の天災は孤島の生活を一層困難にし飢饉、疫病相次いで至り紀元二四三六年には死者三千七百三十三人、二四六二年には死者四百二十六人、二四九六年には麻疹流行して死者六百五十五人、二五一年にも疫病によつて千八百四十三人を失つた。人口減少を防ぐ爲めに二五一九年には多子免稅の法を布いて多産を奨勵するに至つた。大正六年の調査によると本島の人口は一萬三千四百二十人である。昔賑盛であつた白保の如きも今は人口千人を出ない。安良、野底等の部落も昔は五六百人の人口を有したが、今では遂に一人の住民なきに至り、桃里と云ふ部落は今では僅かに三戸男六人女一人になり、立ち竝ぶ家は軒傾き壁落ち、徒に蔓草のはびこるに委せて居る。あの村でももう五人になつた七人になつたと云ふ様な痛ましい話を聞く。(地理教育三月號所載神谷尙志氏「石垣島の慘めな孤島生活と其人口の減滅」に據る)